

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）
分担研究報告書

分担課題：不育症における子宮奇形のimpact

研究分担者 杉浦真弓 名古屋市立大学大学院医学研究科教授
研究協力者 尾崎康彦 名古屋市立大学大学院医学研究科講師
研究協力者 北折珠央 名古屋市立大学大学院医学研究科助教
研究協力者 鈴木貞夫 名古屋市立大学大学院医学研究科講師

研究要旨

不育症患者の精査後初回妊娠において双角子宮、中隔子宮をもつ患者の 59.5%、正常子宮を持つ患者の 71.7%が生児獲得した。子宮奇形を持つ患者は有意に染色体正常流産を経験していた。子宮奇形患者において欠損が大きく、残りの空洞が狭いほど成功率が低下することが世界で始めて明らかとなった。累積成功率を調査した結果は 78.0%、85.5%であり、染色体異常、子宮奇形のない患者の 85%が出産に至っていることがわかった。

A. 研究目的

子宮奇形は正常分娩歴のある女性よりも不妊症、さらに反復流産患者に高頻度にみられる。そのため、双角子宮、中隔子宮に対して形成手術がおこなわれている。しかし、反復流産患者において子宮奇形が見つかった場合にその後の生児獲得率を子宮正常の患者と比較して検討した研究はない。

B. 研究方法

1986年から2007年に不育症精査のために名古屋市立大学を受診した1676組の夫婦について子宮卵管造影を行い子宮奇形の頻度を調べた。さらに子宮奇形をもつ患者と子宮正常の患者のその後の妊娠帰結を比較検討した。

C. 研究結果

1676人のうち、54人(3.2%)に弓状子宮を除く子宮奇形を認めた。精査後初回妊娠において双角子宮、中隔子宮をもつ患者の59.5%(25/42)が生児獲得し、子宮奇形および夫婦の染色体異常を持たない患者の71.7%(1096/1528)が生児獲得した(p=0.084)。さらに累積成功率を調査した結果は78.0%、85.5%であり、有意差は認められなかった。

しかし、流産絨毛の染色体異常率は15.4% (2 of 13) と57.5% (134 of 233)であり、子宮奇形を持つ患者は有意に染色体正常流産を経験していた。さらに子宮奇形患者において中隔の深さをD、残りの空洞の高さをCとすると、流産群のD/C比は出産群のD/Cよりも有意に大きいことが判明した(p=0.006)。

E. 結論

先天性子宮奇形は不育症において悪影響があり、胎児染色体正常流産を起こすことが明らかとなった。しかし、子宮奇形があっても必ず流産するわけではなく、子宮腔の欠損が大きいほど流産しやすいことが世界で始めて明らかになった。

F. 健康危険情報

特になし

G. 研究発表

1. 論文発表

Sugiura-Ogasawara M, Ozaki Y, Kitaori T, Kumagai K, Suzuki S. Midline uterine defect size correlated with miscarriage of euploid embryos in

recurrent cases. Fertil Steril in press.

2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況
(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Sugiura-Ogasawa ra M, Ozaki Y, Kitaori T, Kumagai K, Suzuki S.	Midline uterine defect size correlated with miscarriage of euploid embryos in recurrent cases.	Fertility and Sterility			In press